

社団法人私立大学情報教育協会  
平成 21 年度第 3 回 CCC 社会学グループ運営委員会議事録

- I. 日 時： 平成 21 年 9 月 25 日(金)午後 4 時～6 時  
II. 場 所： 社団法人私立大学情報教育協会事務局会議室  
III. 出席者： 東村担当理事(ネット参加)、土屋委員、津田委員、奥村委員  
事務局： 井端事務局長、森下主幹、山野上

IV. 検討事項

1 到達度の指標の検討

前回の会議で決定された学士力の 5 項目に対応するコアカリキュラムや到達目標等に関して、各委員による提案をもとに意見交換を行った。主な意見は次の通り。

(到達目標について)

- ・ これまでの議論で、ミクロ、マクロ、発見、調査、提言の 5 つの項目が上がってきたが、それぞれの尺度は異なるのであり、とりわけ「発見」の比重は大きい。社会学にとって「発見」はスタートでもありゴールでもある。
- ・ 「マクロ」や「ミクロ」は長さで「発見」は重さであるぐらいの尺度の違いがある。
- ・ 「発見」については、通常であれば当然のものとみなされるしきたりなどを社会的なキーワードで説明できる、というのが到達目標になるのではないか
- ・ 教育とはコミュニケーションである以上、個々の学生が同じ授業から全く違うものを読み取ることがあり、それ自体は否定すべきことではない。
- ・ 「発見」について、コアカリキュラムのイメージ、到達度の測定、測定方法などは、拙速に進めるのではなく、今後時間をとってよく検討する必要がある。
- ・ 「発見」についての前回の項目では「通常は見過ごされている現象」とあるが、「通常は見過ごされている」は必要ないのではないか。
- ・ 通常は見過ごされている、あるいは不可視化されてきた現象が考察の対象になりうることを示すことこそが社会学の面白さであり、「通常は見過ごされている」はあってよい。
- ・ 「所与の問題の存在→解決策の検討」という過程のみならず、そもそも良い問題を発見できるか否かに社会学的研究の意義はある。

以上の議論から、到達目標の順番を、「発見」、「ミクロ」、「マクロ」、「調査」「提言」とすることになった。また、各項目の比重の違いを文言で表現できるよう試みることにした。

(コアカリキュラムについて)

- ・ 同じ科目名であっても大学ごとに内容が異なるので、具体的な科目を入れるのではなく、キーワード的なものを取り入れるのがよいのではないか。
- ・ 隣接領域（文化人類学や社会心理学等）をどのように扱うか（他分野では隣接領域を入

れているところもあり) 検討が必要である。

- 学士力の項目作成とコアカリキュラムの作成との間には断絶がある。社会調査のような技術的なものについてはコンセンサスを得やすいが、社会学にはそうした技術的な側面ばかりでなく、リベラルアーツ的な側面もある。そのため、後者については特定の目的に特定の科目をマッチさせることは困難ではないか。到達度の測定についても同様の問題がある。
- それぞれの項目についてキーワードで整理していけば良いのではないか。

## 2. 今後の進め方

以上の議論を踏まえて、「発見」のコアカリキュラム、到達度の測定、測定方法などについて、次回委員会までにメーリングリストで意見交換を行うこととなった。なお、次回委員会は10月30日(金)午後4時に開催することとなった。